

〈論文〉

## 「他動詞 V1 + 自動詞 V2」型の語彙的複合動詞の構文構造と意味

睦 俊 秀

### 1. はじめに

現代日本語のいわゆる語彙的複合動詞<sup>1</sup>は一般に次の(1)のように、複合動詞を成す2つ(或いは3つ)の語構成要素が同じ自・他の性質を持つとされる。

- (1) a. 「自動詞+自動詞」型：飛び上がる、泣き付く、燃え立つ、など
- b. 「他動詞+他動詞」型：抱き上げる、巻き付ける、飾り立てる、など

実際、野村・石井 1987 を用いて複合動詞の要素の自他の性質(要素が独立した単語の場合の自他の性質)を調べたところ、V2 が自動詞である語彙的複合動詞は殆どが V1 と V2 が「動詞の自他」において同じ性質を持っていた<sup>2</sup>。

しかし、一部ではあるが次の(2)のように語構成要素の自・他性が異なる場合も存在しないわけではない。

- (2) a. 「他動詞+自動詞」型：持ち上がる、抱き付く、煮立つ、など
- b. 「自動詞+他動詞」型：立ち上げる、行き付ける、泣き立てる、など

(2) のように前項要素と後項要素の自他が異なる複合動詞に関して、実際どのような複合動詞があるのかを調査し、それらに見られる意味・構文構造の特徴について述べている先行研究は、管見の限り、見当たらない。

本稿では紙幅の関係により、考察範囲を構成要素の自他が異なる複合動詞のうち、前項要素が他動詞で、後項要素が自動詞である複合動詞に絞り、その意味と構文構造の特徴について述べることを試みる。

---

<sup>1</sup> 複合動詞の複合形態には、その V2 の意味・機能により、次のように「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分けることができる。

- ① 飛び上がる、抜け落ちる、抱き下ろす、など
- ② 持ち続ける、思いかける、読み直す、など

本稿では ①タイプであるに限って考察を行う。②タイプはいわゆる統語的複合動詞であり、V1 との結合において、複合動詞の V1 は自他とは関係ないため、V1 の自他との複合動詞の自他の関連性を考えようとする本稿の趣旨に合わない。

<sup>2</sup> 野村・石井 1987 に収められている頻度数が 10 以上で「V1+自動詞 V2」型の複合動詞は 83 語があり、その中で「他動詞+自動詞」型の複合動詞を含むものは約 2 割(16 語)にとどまった。

本稿では、主に次のことについて考える。

- ・「他動詞 V1+自動詞 V2」型の複合動詞には実際いかなるものがあるかを確認する。また、それらの間の意味・構文構造の共通性を探る。(3 節)
- ・「他動詞 V1+自動詞 V2」型の複合動詞をカテゴリーカルな意味ごとに分け、それぞれに意味・構文構造に見られる特徴を確認する。(4 節)
- ・要素の自他性と、「他動詞 V1+自動詞 V2」型の複合動詞全体の自他性とはいかなる関係があるかについて考察する<sup>3</sup>。(5 節)

## 2. 複合動詞の自他をめぐる問題に関わる先行研究

### 2.1 要素の格支配に関わる先行研究：山本 1983 とそのほか

複合動詞の研究史には、「V1 の連用形+V2」型の語構成に関する様々な分類基準がある。その中の一つが複合動詞における要素の格支配関係による分類で、山本 1983 が代表的である。山本 1983 は、コーパスに基づき、複合語（複合名詞・複合動詞）の形態論的な側面のみならず、構文論的側面にも焦点を当て、その（語）構造とシンタクスについて考察している。山本 1983 では、複合動詞を構成する要素である、V1 と V2 のいずれが表層の格支配を行っているかにより、次のように 4 分類が可能だとされている。

#### (3) 山本 1983 の複合動詞の構造の類型

- a. 一類 [V1-V2] 良夫が本を持ち歩く。： 良夫が本を持つ / 良夫が歩く
- b. 二類 [V1-v2] 景子が二階から下を見下ろす。： 景子が二階から下を見る /  
\*景子が二階から下を下ろす
- c. 三類 [v1-V2] 落ち葉が打ち重なる。： \*落ち葉が打つ / 落ち葉が重なる
- d. 四類 [v1-v2] 研究員が実験に取り組む。： \*研究員が実験に取る / \*研究員が実験に組む  
（「V」は表層格支配力を有している要素、「v」は有さないかもしくは弱い要素を表す。）  
(山本 1983 : 336-337)

一方、西尾 1988、影山 1993 などの多くの先行研究では、語彙的複合動詞は主に V2 によって格支配が行われていると指摘している。本稿では西尾 1988、影山 1993 などの先行研究の指摘に概ね共感しているが、山本 1983 の二類の例のように、複合動詞の格体制に V1 の格体制が反映されていると思われる例が存在することも否定し難い。

<sup>3</sup> 理論的には前項と後項要素の自他により、次のような自他関係が複合動詞において想定可能である。

- a V1 が他動詞、V2 が自動詞である場合  
他+自→自「持ち上がる」 / 他+自→他「飲み物を持ち歩く」
- b V1 が自動詞、V2 が他動詞である場合  
自+他→自（無し） / 自+他→他「パソコンを立ち上げる」
- c V1 が他動詞、V2 が他動詞である場合  
他+他→他「巻き付ける」 / 他+他→自「部屋に引き上げる」
- d V1 が自動詞、V2 が自動詞である場合  
自+自→自「泣き付く」 / 自+自→他（無し）

- (4) 「持ち去る」：太郎が資料を持ち去る：太郎が資料を持つ／\*太郎が資料を去る  
(太郎が去る)

そのほか：「問題を解き進む」、「パスポートを持ち歩く」など

但し、これらの複合動詞はその要素の組み合わせに何らかの制限があり、その種類が限られている。そのため、本稿では V1 によって格支配される複合動詞はいかなるものかを明らかにし、(4) のように V1 の格体制が複合動詞の格体制に反映されるもの（以下、(4) のような複合動詞を「他「他 V1 + 自 V2」」と呼ぶ）の意味・構文構造の特徴について分析と考察を行う。

## 2.2 「他 V1 + 自 V2」の自動詞化に関わる先行研究：松本 1998

松本 1998<sup>4</sup>では V1 が原因を表す複合動詞の場合、下記の (5) のように前項要素と後項要素の主語が一致しない稀なケースがあると指摘している。

- (5) 「打ちあがる」：花火が打ちあがる「\*花火が打つ（人が花火を打つ）／花火があがる」  
その他：「持ち上がる」、「つりさがる」など

松本 1998 では、語彙的複合動詞における動詞の組み合わせの制約として「主語一致の原則<sup>5</sup>」を主張し、原則の例外として (5) の複合動詞を挙げている。松本 1998 ではこれらの例外は「主語一致の原則」に問題があるのではないと主張し、(5) のような主語が一致しない複合動詞はそもそも純粋な複合動詞ではなく、他動詞（「打ち上げる」）の自動詞化によって生じたものだと説明している。その根拠として、(5) の複合動詞には「打ち上げる、持ち上げる、つりさがる」など対応する複合他動詞形が存在することを指摘している。さらに、対応する複合他動詞形が存在しないということは、主語が一致しない複合動詞も存在しないことだと主張している（「\*殴り死ぬ、\*ひっかけつまずく」など）。

しかし、主語が一致しない語構成要素から成り立つ複合動詞は実際に対になる複合動詞を持つという松本 1998 の主張は、実例からの十分な検討が必要だと考えられる。一例として、山本 1983 で挙げられている「不運が打ち重なる」の場合、主語が一致しない動詞ではあるが、その対の「\*打ち重なる」は存在せず、V1 の「打つ」も原因という意味役割を果

<sup>4</sup> 語彙的複合動詞の要素の意味役割により、「V1 が手段：「人を押し倒す」、V1 が「様態：「山に駆けのぼる」、V1 が原因：「雪が降り積もる」」「V1 が背景的情報：「見落とす」」（以上、V2 が意味の中心になる複合動詞）、「V2 が比喩の様態：「花が咲き誇る」、V2 が副詞的であるか、接辞化している：「空が晴れ渡る」」（以上、V1 が意味の中心なる複合動詞）に分けている。

<sup>5</sup> 「主語一致の原則」（由本 1996、松本 1998）

前項動詞の主語と後項動詞の主語が一致しなければならないという複合動詞における動詞の組み合わせの制約の一つ。複合動詞は外項、内項を問わず主語として実現する項同士が一致すると主張（影山 1993 の「他動性調和の原則」より制約が弱い）。

たしてない。本稿では前項と後項の主語が一致しない動詞のその殆どが (5) のような V1 が他動詞で V2 が自動詞の自動詞複合動詞 (以下、「自「他 V1+自 V2」」と呼ぶ) であることに着目し、語構成要素の自他の異なる複合動詞のうち、主語が一致しない動詞について、松本 1998 の主張を再考することを試みる。

### 3. 考察対象となる「他 V1+自 V2」

本稿では、次の手順により考察対象を選定した。まず姫野 (1999 : 245-260) に収録されている複合動詞リストと野村・石井 (1987 : 44 - 181) から「他 V1+自 V2」<sup>6</sup>を含んでいる複合動詞を選んだ。次に選ばれた複合動詞から、本稿の考察対象ではないアスペクトや相互性などを表す統語的複合動詞<sup>7</sup>を除いた。続いて、残された語彙的複合動詞の中で「他 V1+自 V2」型の複合動詞を確認し、それらをすべてコーパス (BCCWJ)<sup>8</sup>で検索し、同一の V2 において異なった「他 V1+自 V2」型が 3 語以上みられる複合動詞 (～上がる : 「持ち上がる」、「煮上がる」、「盛り上がる」など) を、本稿の対象とした。

本稿の考察対象である「他 V1+自 V2」型を含んでいる「V1+自 V2」の異なり語数とその中の「他 V1+自 V2」型の複合動詞の異なり語数を示すと、次の表 1 のようになる。

表 1 : 「V1+自 V2」の異なり語数及び「他 V1+自 V2」の異なり語数

	↑ 上がる	↓ 付く	↓ 去る	↓ 入る	↓ 立つ	↓ 回る	↓ 歩く	↓ 返る	↓ 寄る	↓ 進む	↓ 抜ける	↓ 下がる	↓ 当たる
「V1+V2」	72	55	52	38	34	28	26	23	20	11	12	7	5
「他 V1+V2」	38	20	25	18	9	9	14	6	10	10	3	5	4

「V1+V2」 : 「他 V1+V2」を含んでいる「V1+V2」の異なり語数、「他 V1+V2」 : 「他 V1+V2」の異なり語数

さらに、「他 V1+自 V2」型の複合動詞の自他性を基準に異なり語数を示したのが、次の表 2 である。表 2 に見られる「他 V1+自 V2」型の複合動詞の特徴は、「他 V1+自 V2」型の複合動詞が自・他のどちらかに偏っていることである。このような偏りによる違いについては、4 節と 5 節で後述する。

<sup>6</sup> 動詞の自他を判別する問題に関して、様々な見方があると考えられるが、本稿の目的は「動詞の自他」そのものではないため、主に格関係 (動作の働き対象であるヲ格名詞をとるか否か) を他動詞と自動詞を判断する基準としている。「空を飛ぶ」などの動作の対象ではないヲ格名詞をとる動詞は、直接動作の働きかけの対象がないため、本稿では他動詞として扱っていない。

<sup>7</sup> 本稿でいう統語的複合動詞の定義は影山 1993、姫野 2001 に倣ったものである。以下、本稿の考察対象に含まない「～V2」を示す。

・始動 : ～かける、～出す、～はじめる、#～かかる ・継続 : ～まくる、～続ける  
 ・完了 : ～終わる、～終える、～尽くす、～切る、～残す、～抜く #果てる  
 ・未遂 : ～損なう、～損じる、～そびれる、～兼ねる、～遅れる、～忘れる、～残す、～謝る、～あぐねる、#～損ねる ・過剰行為 : ～過ぎる ・再試行 : ～直す ・習慣 : ～つける、～慣れる、～飽きる  
 ・相互行為 : ～合う ・可能 : ～得る \* #は影山 1993 にはない語彙的複合動詞

<sup>8</sup> 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』モニター公開データ (2009 年度版)

表 2: 「他 V1+自 V2」の自他別異なり語数

	↘上がる	↘去る	↘付く	↘入る	↘歩く	↘進む	↘寄る	↘回る	↘立つ	↘返る	↘下がる	↘当たる	↘抜ける
自	37	3	20	16	5	-	9	-	8	4	5	4	3
他	1	22	2	3	10	10	1	9	1	2	-	-	-
計	38	25	20	18	14	10	10	9	9	6	5	4	3

他: 「他 V1+自 V2」が他動詞の場合 自: 「他 V1+自 V2」が自動詞の場合

表 1、2 に挙げている V2 の他にも、V1 と V2 の自他の性質の異なる動詞があると思われる (山本 1983 の「打ち重なる」など)<sup>9</sup>。しかし、実例で確認したところ、それらの「他 V1+自 V2」型の複合動詞は非常に稀で、それぞれの V2 において例外的と言える使い方のみであった。そのため、本稿では参考例としてのみ扱う。

なお、「他 V1+自 V2」型の複合動詞の共通点として挙げられるのは、V2 の語彙的な意味及びそれらの構文構造の特徴である。本稿の考察対象の V2 は、単独の動詞としての語彙的な意味がくとりつけ／とりはずし<移動><位置の変化>に関わっている。さらに、これらの V2 はその語彙的な意味により、ヲ格名詞ではない補語 (ニ格名詞、カラ格名詞など) を取りやすい性質を持っている。このように補語を取るという側面は他動詞の性質に重なる部分があり、基本的に補語を取らない自動詞 V2 (「～笑う」「～泣く」) に比べ、他動詞の V1 と複合動詞を成すのに影響を及ぼしていると考えられる。

本稿では、言語学研究会編 1983 と早津 2009 を参考にし、独立の単語としての V2 とニ格名詞とが如何なるむすびつきを成すのかによって表 3 のようにくとりつけ<移動><とりはずし><存在><その他>という意味タイプに分類し、4 節で意味タイプごとに動詞の意味と構文構造を考察することにする。

表 3. 「他 V1+自 V2」の意味タイプ

意味	とりつけ			移動			とりはずし			存在	その他		
他 V1+自 V2	↘当たる	↘入る	↘付く	↘進む	↘寄る	↘返る	↘上がる	↘去る	↘抜ける	↘下がる	↘立つ	↘回る	↘歩く

<sup>9</sup> 本稿で除かれている「他動詞+自動詞」型複合動詞には「～重なる」(「折り重なる」「積み重なる」のみ)、「～落ちる」(「注ぎ落ちる」「叩き落ちる」のみ)、「～こむ」がある。前者の 2 つは本文に書かれている条件に合わなかったため、除かれている。そして、後者の「～こむ」の場合、現代日本語においてその自他を問うことが難しいため、本稿では一旦扱わないことにする。

#### 4. 分析

##### 4.1 <とりつけ>のV2:「他V1+当たる」「他V1+入る」「他V1+付く」の場合

「他V1+当たる/入る(いる)/付く」のV2は、独立した動詞として<(具体)物>の二格名詞と組み合わさる、<とりつけ>の意味をもつ自動詞である。

表4:「他V1+当たる」「他V1+入る」「他V1+付く」のV1

	V1+V2が他動詞の場合	V1+V2が自動詞の場合
他V1+当たる		突き～ 思い～ ぶち～ 見～
他V1+入る	付け～ <sup>10</sup> (失敗を) 恥じ～ (演奏を) 聴き～	打ち～ 押し～ 分け～ 忍び～ 踏み～ 眺め～ 取り～ 攻め～ 感じ～ 割り～ にじり～ 突き～ 折り～ 食い～ (CDに) 聴き～ 見～
他V1+付く	(アイデアを) 思い～ 考え～	追い～ かみ～ 張り～ 食い～ 取り～ 焼き～ 結び～ 吸い～ 寄り～ 巻き～ 食らい～ かぶり～ かじり～ しゃぶり～ 抱き～ 引っ～ まとい～ 考え～

表4から分かるように、「他V1+当たる/入る(いる)/付く」が他動詞の場合、その異なり数が少なく、特に「他V1+当たる」の場合、今回の調査では用例は見当たらなかった。また、「他V1+入る」「他V1+付く」の構文構造は<物【付着先】>の二格名詞と組み合わさるV2の構文構造とは異なっており、二格名詞が文中に現れない。さらに、「他V1+入る」の構文においては、「じっと」「深く」などの様態副詞と共に起することで、「V1の様態の深化」という語彙的な意味を持つことになる。

つまり、複合動詞の文法的な意味においても、語彙的な意味においても、V2の性質が積極的に反映されているとは言えない。

- 1) <sup>11</sup>彼女はある日リストのハンガリアン・ファンタジーを演奏することになった。そしてその演奏をじっと聴きいていたのが私の父であった。(ピアニストの休日)
- 2) しかし祖父(七之丞)は翁が眠っているのではないことに気付き、調子に乗って小兵衛さんのことを持ち出したことを深く恥じ入り、そのことをあとで河野主一郎さんに話したそうでございます。(翔ぶが如く)
- 3) 一般に新語を考え付くのは高校生などギャルと呼ばれる若者が多いのですが、～(後略)  
(ボケ(痴呆)は予防できる)

<sup>10</sup> 「付け入る」の用例はほぼ「付け入る隙もない」の形しかなかった。

<sup>11</sup> 4章からの用例の番号は\*)として1)からつけていく。

一方、「他 V1+当たる／入る（いる）／付く」はその殆どが自動詞である。その際、V2 の意味は複合動詞の中心的な意味を成し、また、構文構造においても V2 の構文構造と同じく、二格名詞／（「他 V1+入る」はへ格名詞も）がその構文構造に現れる。但し、「他 V1+入る」の二格／へ格名詞は<物【付着先】>ではなく、<場所【行く先】>の二格／へ格名詞である場合が多い。

- 4) また、平成 5 年 6 月に俳優の三浦友和さん宅に押し入り、妻の百恵さんに軽いけがを負わせた男は、国税庁職員と名乗って訪れたそうです（毎日新聞平成 5 年 6 月 23 日）。（税の社会学）
- 5) 犬たちはさらに激しく吠えながら、鉄男の腕に噛みついた。（ザホームレス！大逆転）
- 6) そう考えると、スイス製の腕時計のひとつひとつが持っている「唯一性」の問題に思い当たります。（腕時計一生もの）

自動詞「他 V1+当たる」「他 V1+入る」「他 V1+付く」の場合、基本的に V1 は V2 の付帯状況もしくは様態を表すが、4) や下記の 7) -8) のように、V2 の動きに対する程度性（強さ）の意味合いが感じ取れる場合も少なくない。この場合、V1 の意味は抽象化し、接（頭）辞化への移行が起きているとも考えられる。その際、7) -8) のように、二格名詞も<もの／場所>というカテゴリカルな意味を失う。

- 7) 卒業後、絵の得意だった彼女はデザインの専門学校に進学した。しかしそこでも大きな壁にぶち当たってしまった。（不登校と向き合う）
- 8) どんなにひどい目にあっても、そこでの仕事に必死に食いつくしかないんだ。（メガネをかけた犬）

#### 4.2 <移動>の V2 : 「他 V1+上がる／返る／寄る／進む」の場合

V2 の意味タイプが<移動>を表す「他 V1+上がる／返る／寄る／進む」の場合、「他 V1+進む」を除くと、殆どの「V1+V2」は自動詞である。

表 5 : 「他 V1+上がる／返る／寄る／進む」の V1

	V1+V2 が他動詞の場合	V1+V2 が自動詞の場合
他 V1+上がる	(株値を) 買い～	打ち～ 押し～ 繰り～ 切り～ 漕ぎ～ 攻め～ 競り～ 託し～ 突き～ 付け～ 積み～ 吊り～ 引き～ 巻き～ もぎ～ のし～ にじり～ 持ち～ 盛り～ 思い～

		のぼせ～ 完編み～ <sup>12</sup> 完織り～ 完書き～ 完組み～ 完仕立て～ 完焚き～ 完焼き～ 完茹で～ 完縫い～ 完塗り～ 完漬け～ 完蒸し～ 完彫り～ 完刷り～ 完(墨が)磨り～
他 V1+返る	振り～ 見～	ひっくり～ 向き～ 巻き～ 澄まし～ <sup>13</sup>
他 V1+寄る	(数人が資金を) 持ち～	探り～ 打ち～ (人に) 詰め～ 擦り～ にじり～ 攻め～ したい～ 思い～ (～について) 言い～
他 V1+進む	掘り～ 読み～ 編み～ 書き～ 解き～ 飲み～ 縫い～ 突き～ かき分け～ (円を) 買い～	

4つの複合動詞のうち、例外的な「他 V1+進む」について先に述べていく。

「他 V1+進む」は他動詞である場合が殆どで、その多くが9)のように「V1して(もしくは「V1するのが)」、進む」という意味を持つ。さらに、その【行く先】が構文に示されないか、示されても<場所>ではない場合が多いため、9)・10)のように「物理的な人・ものの移動」の意味はほとんど感じ取れない。そのため、独立の動詞「進む」とは異なり、複合動詞「V1+進む」は(物理的な)移動動詞とは言い難い。

- 9) 教材に例題や例文が載っていて、それを見ながら、似たパターンの類題を解き進むうちに、だんだんと感覚がつかめてきます。(がんばる力とたしかな学力)
- 10) 1本目の編みひも⑩を反対側の中央の1本手前の縦ひもの半目のところまで編み進み、引き返す。(エコクラフトで編むバッグ・かご・小もの)

一方、「他 V1+上がる/返る/寄る」の場合、殆どの「他 V1+自 V2」が自動詞である。その際、V1の語彙的な意味が複合動詞に直接反映されている「ロールスクリーンが巻き上がる」「敵にせめよる」のようなものも一部あるが、独立の動詞としては「ものに対する働きかけ性」をもつ他動詞としてのV1の場合でも、このタイプの複合動詞になると、物理的な働きかけ性が薄れている場合が多い(11)・13)を参照)。この場合、松本1998では、V1の意味が「原

<sup>12</sup> 「他 V1+上がる」が「完成」の意味をもつ場合

<sup>13</sup> 「向きかえる」、「巻きかえる」、「澄ましかえる」はコーパスからそれぞれ1例しか得られなかった。臨時語として見なすべきかもしれない。



因」を表すと主張されているが、下記の 11) -13) を見ると必ずしもそうだとは言い難い。しいて言うなら、11) -13) は様態に近いと思われる。

- 11) 以前にもまったく同じ場所にマッコウジラが打ち上がったことから、その条件として海の流れや地形が作用していると考えられます。(ビーチコーミング学)
- 12) ライオンも飛び出して来て“それッ、凄い格闘”って、みんなが思ったとたん、ライオンがしなしなとなって奴隷にすり寄り、仲よくなってしまう。(風の組曲)
- 13) ある部分では断崖の下に荒波がまき返り、ある部分ではゆるやかな波が夕立ちとともに白砂を湿めらせていたが、そのいずれの波も今は、友の肩を親しげに叩く指さきなのだった。(睡魔のいる夏)

なお、<とりつけ>の V2 の「他 V1 + 入る / 付く」に比べ、二格名詞 / へ格名詞が文中に現れない場合もしばしばある。その際、次の 14) のように語彙的な意味が特殊な意味(「切りあがる」は株の用語)になり、より「ひとまとまり的」な性質が強く感じられる場合がある。

- 14) なお、EC との貿易については、日欧双方の通貨がドルに対して切り上がっているため、実質的な変化がなくても、見掛け上 20% 近い増加を示すことに注意する必要がある。(通商白書)

さて、「他 V1 + 上がる」の場合、完成の意味をもつ場合がある(表 5 の<sup>9</sup>印の動詞)。その際、<場所【行く先】>の二格名詞などは構文に現れない。これらの動詞は主語の「完成」という意味を持ち、「打ちあがる」などの複合動詞とはその語彙的な意味や構文構造において全く異なる特徴を見せる。上記の 11) の「打ちあがる」と次の 15) の「彫り上がる」の例を参照されたい。

- 15) その日は三時間、あばら骨や背骨が痛くなるほど辛抱して、やっと七、八センチ四方の刺青が彫り上がった。(回心)

この違いは V2 「上がる」の多義性に関わる問題と思われるため、本稿ではこれ以上触れずに、今後の課題としたい。

#### 4.3 <(出発点からの)位置変化／とりはずし>の V2

: 「他 V1 + 去る / 下がる / 抜ける」の場合

V2 の意味タイプが <(出発点から)位置変化／とりはずし>の場合、「他 V1 + 去る」は殆どが他動詞であり、「他 V1 + 下がる / 抜ける」の多くは自動詞であるという特徴を持つ。

表 6 : 「他 V1+去る／下がる／抜ける」の V1

	V1+V2 が他動詞の場合	V1+V2 が自動詞の場合
他 V1+去る	連れ～ 盗み～ 置き～ 奪い～ 拭い～ 除き～ 取り～ 持ち～ 運び～ 引き～ 葬り～ 伴い～ 銜え～ 論じ～ 評し～ 忘れ～ 抜き～ 破り～ 消し～ 捨て～ 削り～ あらい～	滅ぼし～ 辞し～ 漕ぎ～
他 V1+下がる		吊り～ 盛り～ 繰り～ 引き～ 食い～
他 V1+抜ける		切り～ すり～ 突き～

まず、「他 V1+去る」は他動詞の場合が多く、その語構成要素の語彙的な意味や構文構造が下の 16) のように、〈場所〉を表す二格名詞とくみあわせるので、要素がもつ構文構造から複合動詞の構文構造が推測できる。しかし、「忘れ去る」「消え去る」などの「去る」の意味は 17) のようになりに抽象化され、16) のように〈場所〉の二格／へ格／マデ格などの名詞とは組み合わせられない。その場合の「他 V1+去る」は V1 の強い程度性を表すこともある。

16) ペゼクリクやキジルの壁画を、彼は剥ぎとり、ベルリンの民族博物館に持ち去ったのである。(万邦の賓客)

17) 二重人格というのはもう一方の自分をきれいに忘れさっている病気だが、普通の人間というのも無意識に人格を使いわけているものだ。(アナザヘヴン)

また、「他 V1+去る」の中で「引き去る」「取り去る」が他動詞として働くという点は他の複合動詞とは働きを異にし、特に注目に値する。複合動詞の V1 が「引く」、「取る」の場合、V2 が意味の中心になり、「引く」や「取る」の意味は抽象化されるのが一般的である (cf. 「引き上がる」、「取り付く」「引き立つ」など)。しかし、「引き去る」「取り去る」は他動詞として働き、文の構文構造において他動詞としての「引く」「取る」の構文構造が反映されており、その意味においても V1 の独立の動詞としての語彙的な意味がそのまま生きている。このような特徴からも、「他 V1+去る」は複合動詞の構成要素の意味・構文構造が比較的透明な組み立て性を持っていると判断される。

18) このようにして実行されるアポトーシスであるが、結局その意味は、不必要になった細胞を生体から取り去ることにあると考えられる。(生化学)

19) 地代は、人間のしわざとみなせるすべてのものを引き去ったり、差し引いたりしたあ

とに残る自然のしわざである。(マルクス・コレクション)

次に、「他 V1+下がる」「他 V1+抜ける」の場合、いずれの場合も自動詞である。

「他 V1+下がる」「他 V1+抜ける」の場合、V1 は 20) -22) のように殆ど語彙的な意味(物理的な動作の意味)を表さず、複合動詞の意味を要素の語彙的な意味から把握するのは難しい。これらは、ゆもと 1977 でいう「ひとまとまり」的な性質<sup>14</sup>が非常に強い複合動詞と言える。これらの動詞の「ひとまとまり的」な性質は、「他 V1+下がる」「他 V1+抜ける」と組み合わさる名詞のカテゴリカルな意味がくもの>やく場所>ではなく、抽象名詞や人名詞であることから裏付けられる。

20) 執拗にホテルに帰るように命じる病院の関係者に食い下がり、なんとか病室で待機することを許されます。(人生、考えすぎないほうがいい)

21) だめだと言って引き下がる相手でないことをみんな知っている。(逃げない人を、人は助ける)

22) 自分の未熟さを考えれば、私はこの難局をかなり上手に切り抜けたと思う。(マーク・トウェインコレクション)

一方、数は少ないが、V2 が「去る」である自動詞複合動詞の場合がある(「滅ぼし去る」「漕ぎ去る」)。これらは V2 が「他 V1+下がる」「他 V1+抜ける」である複合動詞に比べ、次の 23) のように V1 の語彙的な意味が文脈から読み取れ、V1 と V2 を分析的に解釈することができる。この点から同じく自動詞複合動詞であっても、他動詞になりやすい「～去る」方がより意味が透明であると考えられる。

23) 鉄砲を放って小舟は矢のように加速して漕ぎ去って(→漕いで去って)ゆく。(女の浮城)

#### 4.4 <存在>の V2 : 「他 V1+たつ」の場合

V2 の「立つ」は、「通路上に立つ」のように<場所>の二格名詞と組み合わせられるが、その二格名詞の文法的な意味は前節の V2 とは異なって【行く先】【付着先】などではなく、【存在空間】である。このような「他 V1+たつ」はその数は少ないが、次の表 7 のような複合動詞が挙げられる。

<sup>14</sup> ゆもと (1977) では、あわせ単語(本稿でいう複合語)の意味は、それを構成する要素の意味と密接な関係を持っていることから、あわせ単語の意味には「くみあわせ的な」性質があると述べる。一方、「くみあわせ的な」性質との対比においてあわせ単語の意味が要素との関係を失い、全体がひとまとまりで意味上の一単位をなしていることを「ひとまとまり的な」性質と呼ぶ。

表 7: 「他 V1+たつ」の V1

	V1+V2 が他動詞の場合	V1+V2 が自動詞の場合
V1+たつ	思い～	A: 掻き～ 切り～ そそり～ 連れ～ B: 煮～ 奮い～ 思い～ 引き～

「他 V1+たつ」の場合、自動詞が多いが、その構文構造により、表 7 の A と B の 2 種類に分けられる。まず A と分類された「他 V1+たつ」の構文構造には、V2 の「立つ」の構文構造が窺われ、下の 24) のように「立つ」と同じく<場所【存在空間】>の二格名詞が複合動詞の構文構造に現れる。

24) 高さ六十七メートルのコンクリートの堤体が眼前に垂直にそそり立っている。(人間の証明)

一方、B グループは A とは異なり、その構文構造に二格名詞とのかかわりが窺われない。そのため、A グループより、語構成要素の意味・構造が不透明であると言えよう。

25) 鍋に辛口の白ワインと同量のチキンコンソメを入れ、塩と胡椒で調味して煮立ったところへ全部の茸類を入れて煮ます。(ごちそうものがたり)

このような自動詞「他 V1+立つ」の V2 の構文構造と意味がどれだけ複合動詞に反映されているかという点において、4.2 で触れた「他 V1+上がる」と類似した特徴が見られる。この点は V2 の多義的な側面と関わっていて、今後さらなる検討が必要である。

続いて、他動詞の「他 V1+立つ」は、今回の調査では次の 26) のような「思い立つ」の例しか見つからなかった。

26) こういう寒村の百姓身分の少年が蘭学を学ぶことを思いたつというのは江戸後期以後の社会のおもしろさであり、同時に学問好きな宇和島の藩風がこのあたりにまで及んでいたということがいえないか。(南伊予・西土佐の道)

問題は、V1 の「思う」が「対象に働きかけ性」をもつ純粋な他動詞ではない点にある。4.1 の「V1+つく」にも同じ問題があり、「他 V1+つく」の他動詞の場合も、「思いつく」「考えつく」しかない。「思う」「考える」が V1 にくる複合動詞が自他の両方の性質を併せ持っていることについては、今後の検討課題としたい。

#### 4.5 その他:「他 V1+歩く」「他 V1+回る」の場合

V2の「歩く」「回る」は、前節まで触れたV2と構文構造と意味の面で異なっており、基本的に二格・へ格・カラ格・マデ格などの名詞とは組み合わせらず、様態を表す動詞である。しかし、「位置変化の際に伴われる様態」を表す語彙的な意味を持つため、「行く」「来る」などの方向性の動詞とよく一緒になり、「歩いていく」「回ってくる」のような手続きで方向性の移動動詞の意味で使われることが多い。さらに、「家まで歩く」のように単独で使われても移動の意味が読み取れる場合も少なくない。そのため、前節で扱った複合動詞と全く意味・構文構造の面において関わりがないとは言い難い。

表 8: 「他 V1+歩く」「他 V1+回る」の V1

	V1+V2 が他動詞の場合	V1+V2 が自動詞の場合
他 V1+歩く	嗅ぎ～ 探し～ 言い～ 語り～ 持ち～ 配り～ 売り～ 聞き～ 食べ～ (酒を) 飲み～	(東京を) 食い～ (飲み屋を) 飲み～ (川を) 釣り～ (近所の家を) 頼み～ (町を) 流し～
V1+回る	嗅ぎ～ 探し～ 調べ～ 転げ～ 売り～ 荒らし～ 見～ (ウィルス)を 移し～ 訪ね～	

「他 V1+歩く」の場合、その多くが他動詞である。他動詞の「他 V1+歩く」は下記の 27) のように<場所【行く先】>の二格名詞と<もの・こと【対象】>のヲ格名詞と組み合わせたり、「足を動かし、体を移動させる」という意味ではなく、「【行く先】に【ある対象】を {V1しながら/V1して} 移動する」という意味合いを持つ。

「他 V1+回る」は今回の調査ではすべて他動詞であり、「他 V1+歩く」と似た意味を持つ。但し、構文構造には違いがあり、28) のように<場所【行く先】>の二格名詞とは組み合わせらず、「<もの/こと/場所【対象】>を {V1しながら/V1して} めぐる」という意味を持つ。

27) 六本木周辺にあった名だたる外資系企業、商社に会社案内を配り歩いた。(逃げない人を、人は助ける)

28) 姉は部屋のあちこちを捜し回り、何とか二十四枚のグラフ用紙をかき集めた。(妊娠カレンダー)

さらに、他動詞の「他 V1+歩く/回る」は 27) -28) の例のように「V1 の動作の反復性」という意味特徴を表す場合が多い。27) -28) は「外資系企業、商社に」「部屋のあちこちを」という名詞の複数の意味からも動詞の「反復性」が支えられている。

今回の調査の結果、「他 V1+歩く」は、自動詞の場合もヲ格名詞と組み合わせられ、「他 V1+歩く」の格関係はすべて「～ヲ V1+歩く」という格関係を持っていた。しかし、その格の文法的な働きには違いが見られ、自動詞「他 V1+歩く」と組み合わせるヲ格名詞のカテゴリカルな意味はくもの・こと【対象】>ではなく、<場所/時間>などの状況語であった(30)-31)を参照)。このような構文構造の違いから、自動詞「他 V1+歩く」の意味は他動詞「他 V1+歩く」より、V1 が一部の語彙の意味に制限されていて(\*様々な家を配り歩く)、その用法にも慣習化が起きたと考えられる。このような現象は「他 V1+回る」には見られない。

- 29) 川釣り専門で、年に何回か休みをとっては、世界中の川を釣り歩いていたというから優雅なもんだ。(満月の夜、モビイ・ディックが)
- 30) 夜になると、この母親が乳飲み子を抱いて、「この子にお乳をください」と泣きながら近所の家を頼み歩く。(小説近藤勇)

## 5. 考察

以上、「他 V1+自 V2」型の複合動詞について考察した。4 節で検討した内容を「他「他 V1+自 V2」」と「自「他 V1+自 V2」」に整理し、以下にまとめる。

### ㉑ 他動詞「他 V1+自 V2」の場合

「他 V1+自 V2」の多くが他動詞(以下、「他「他 V1+自 V2」」)である「～去る」「～進む」「～歩く」「～回る」は、接尾辞的機能を果たす統語的複合動詞に似た側面を持つ。姫野 2001 では、本来、日本語の複合動詞は(それぞれの構成要素の)動詞格支配の同質性が原則であるが、接尾辞的機能を果たす「～はじめる」「～だす」などの後項動詞は、前項動詞の自他とは関係なく自由に結合すると述べている(姫野 2001: 11)。「～去る」「～進む」「～歩く」「～回る」も、「～出す」と同じく、その語彙的な意味が具体的な(物理的な)移動・状態変化という意味を失い、「過去を忘れ去る(時間)」「問題を解き進む(進行変化)」「家の中を調べ回る(反復)」のように時間的・状態(進行)変化・反復などの抽象化した意味へ進み、接尾辞的な機能を果たしていると思われる。この接尾辞的な働きをもった結果、他動詞まで含めた様々な V1 と結合できると考えられる。但し、場所名詞を伴う構文(「家から絵を持ち去る」「外に答えを探し回る」)では、その語彙的な意味(位置変化)もまだ残存しており、「～始める」「～出す」のように接尾辞化へ完全に移行しているとは言い難く、接尾辞化の過程の中に置かれていると思われる。

### ㉒ 自動詞「他 V1+自 V2」の場合

「他 V1+自 V2」が主に自動詞である「～入る」「～付く」「～当たる」「～上がる」「～返る」「～寄る」「～下がる」「～抜ける」「～立つ」の他動詞複合動詞と異なる特徴は、すべ

て V2 によって複合動詞の格支配が行われることである。これにより自動詞複合動詞は先行研究でいう「動詞格支配の同質性が原則」に従わない例外的な複合動詞になる。「他 V1+自 V2」の構成を持つ複合動詞が自動詞になることのできる理由は、その語源的な問題も絡み合っていると推測できるが、現代日本語の範囲で考えられる理由としては、複合動詞の中では V1 の語彙的な意味が殆どなくなることと関連があると思われる。例えば「持つ」は他動詞の「他 V1+自 V2」にも多くみられ（「持ち去る」「持ち歩く」）、その時の意味は「所有」「把持」という具体的な動作の意味を表す。

一方、「自「他 V1+自 V2」」の場合は、「持ち上がる」のみで、その V1「持つ」はものの動作を表すわけではなく「上部／上に持ち上げたような状態」を表す（「地面が持ち上がる」など）。ある動詞が独立した単語としては具体的な動作を表すのに、「自「他 V1+自 V2」」の V1 になるとその語彙的な意味が抽象化され、V2 の様態を表すことは、ほかの「自「他 V1+自 V2」」の V1 にもよく見られる。結局、「自「他 V1+自 V2」」の V1 は V2 の様態（もしくは一部は V2 の原因）を表す副詞的な役割のみを果たし、実際動詞として動作の意味と機能を失っていると思われる。その結果、動詞としての文法的な働き（格支配）にも影響を及ぼし、V1 の格体制は「自「他 V1+自 V2」」の格体制に反映されなくなったのであろう。

表 9: 他動詞の「他 V1+自 V2」と自動詞の「他 V1+自 V2」の相違点

	他動詞の「他 V1+自 V2」	自動詞の「他 V1+自 V2」
V2 の種類	「～去る」「～進む」 「～歩く」「～回る」	「～入る」「～付く」「～当たる」 「～上がる」「～返る」「～寄る」 「～下がる」「～抜ける」「～立つ」
意味の中心	V1	基本的に V2
要素と複合動詞の格体制の関係	V1・V2 の格体制を反映 (V2 と V1 の主語一致)	V2 の格体制のみ反映 (V2 と V1 の主語不一致あり)
V1 の意味	・共通の V1 は少ないが、主体動作・客体変化動詞（「掘る」「縫う」「奪う」「消す」「配る」「持つ」など）が比較的多く、具体的な意味を持つ ・人の認識・言語活動動詞の V1（「言う」「調べる」「思う」など）あり	主体動作動詞のうち、接触動詞（「打つ」「押す」「分ける」「引く」「突く」「食う」など）が多いが、物理的な動作・接触などの具体的な意味を表さない
V1 の機能	主語の動作・変化を表す	位置変化・移動に伴われる様態を表す
V2 の意味	・位置変化・移動を表す ・複合動詞の構成要素としては具体的な移動・物理的位置変化の意味はほぼ表さない	V1 の結果状態の位置変化・移動を表す

V2 の機能	V1 の時間的変化・程度変化を表す (接辞の役割)	V1 の動作・変化による結果を表す
組み合わせる名詞	1. フ格名詞の補語を取る 2. 「～去る」「～進む」の場合、ニ格名詞がない場合が多い 3. 「～歩く」「～回る」の場合、場所名詞の補語が必須になる	1. フ格名詞の補語を取らない 2. ニ格名詞の意味が抽象名詞か、抽象化される場合が多い

## 6. 結論および今後の課題

以上、本稿では「語構成要素の自・他性の違い」に関わる複合動詞の意味・構文構造の問題について事例に基づいて考察を行った。まず、コーパスで収集した例から「他動詞＋自動詞」型の複合動詞を選定し、それぞれの構文構造の特徴及び意味を確かめた結果、「他V1＋自V2」が他動詞で、V1の他動性が保持されている複合動詞（「～去る」「～進む」「～歩く」「～回る」）とその多くが自動詞でV1の他動性は保持されていない複合動詞（「～入る」「～付く」「～当たる」「～立つ」「～寄る」「～返る」「～下がる」「～落ちる」「～抜ける」）があった。前者の場合、そのV2の語彙的な意味は殆どなくなり、接辞に近くなるものの、V1はもちろんV2の格体制も複合動詞に反映されていることが分かった。それに対し、後者の場合、V2の独立の動詞として持つ格体制や語彙的な意味が複合動詞に反映され、V1はその動詞としての意味・機能を殆ど果たさず、V2の様態を説明する修飾的な機能を果たしている。また動詞によっては意味の慣習化が進んでいる場合もあった。

今後、考察の射程を広げ、本稿では扱うことができなかった自他に関わる他のタイプについても検討していきたい。

## 参考文献

- 李善姬 2009 『日本語の移動動詞の研究』 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士論文  
(<http://hdl.handle.net/10108/56734>)
- 影山太郎 1993 『文法と語構成』 ひつじ書房
- 言語学研究会編 1983 『日本語文法・連語論（資料編）』 むぎ書房
- 西尾寅弥 1988 『現代語彙の研究』 明治書店
- 早津恵美子 2009 「語彙と文法との関わり - カテゴリカルな意味 - 」 『政大日本研究』 6（台湾） 政治大学日本語文学系：1-70
- 姫野昌子 1999 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
- 姫野昌子 2001 「複合動詞の性質」、 『日本語学』 20（8） 明治書院：6-15
- 松本曜 1998 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114：37-83
- 山本清隆 1983 「複合語の構造とシンタクス」 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 - 5 - 計算機用レキシコンのために』 情報処理振興事業協会：315-380



ゆもとしょうなん 1977 「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27 東京外国語大学：31-46 【再録：斎藤倫明・石井正彦（1997）『語構成』日本語研究資料集 ひつじ書房：176-191】

由本陽子 1996a 「語形成と語彙概念構造 - 日本語の『動詞+動詞』の複合語形成について - 」奥田博之教授退官記念論文集刊行会（編）『言語と文化の諸相 - 奥田博之教授退官記念論文集』英宝社：105-118

### 参考資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009年度版）  
野村雅昭・石井正彦 1987『複合動詞資料集』国立国語研究所